

精神障がいを持つ方を対象とした競技性スポーツの 実施・普及に関する研究

鎗田 英樹***
勝嶋 雅之*

抄録

現在、精神障がい者を対象とした競技スポーツは、他の2障害に比べ遅れている。精神障がい者総数320万人に対して競技種目は極めて少なく、また当事者を対象としたニーズ調査も少数であるなど、実施・普及体制は未確立である。

そのため、本研究は精神障がいを持つ当事者選手・および支援者に対して聞き取り調査を実施し、その結果から精神障がい者スポーツの実施・普及モデルを構築することを目的とした。

方法として、競技性スポーツ大会に選手として携わっている精神障がいを持つ当事者選手（以下選手）および先進的な実施・普及に取り組んできた支援者（以下支援者）を対象に、意義・目的の聞き取りを中心とした半構造化面接を実施。聴取内容は逐語録化し、内容分析を行った。

結果、選手25名および支援者9名に対して聞き取り調査を行った。選手は競技志向・向上心の他に、リハビリテーションや仲間との交流を意義・目的と考えていた。しかし半数は病状への影響を感じておらず、むしろ気持ちの面で好影響と捉えていた。また大会の在り方にソーシャル・インクルージョンを望んでいた。また競技に専念する一方で、自身の病状に対して不安を持っていることが示唆された。選手の多くは、たまたま所属した施設のチームに繋がっており、チームを自ら探して所属した選手は少数であった。

支援者は背景にスポーツ経験を持っており、当事者支援の中で効果の実感や自身のイメージを覆された経験を持っていた。また、スポーツを介したアンチ・スティグマやソーシャル・インクルージョンを活動の目的とした。

選手にとって競技性スポーツは、競技性・向上心だけではなく再社会化する上での社会的リハビリテーションとしても機能している。選手たちはレクリエーションとしてスポーツに関わり始めるが、そこに競技性スポーツが加わることによって重層的な目的が加わり、その過程でエンパワメントされ再社会化されていくと考えられる。

キーワード：精神障がい者， 競技性スポーツ， ソーシャル・インクルージョン
再社会化

* 帝京平成大学 〒290-0193 千葉県市原市うるいど南4-1

** 日本社会事業大学大学院 社会福祉学研究科博士後期課程 〒204-8555 東京都清瀬市竹丘3-1-30

Promotion and Dissemination of Competitive Sports for People with Mental Health Problems

Hideki Yarita *,**
Masayuki Katsushima*

Abstract

Competitive sports for people with mental health problems lag behind those for people with other types of disability. The variety of events is insufficient to cover the estimated total of 3.2 million people with mental health problems. Furthermore, their needs regarding this issue have not been actively examined to date, resulting in unestablished systems to promote and disseminate competitive sports for them. Therefore, to establish such systems, we interviewed athletes with mental health problems and their supporters.

Semi-structured interviews were conducted, involving 25 athletes participating in competitive sports for people with mental health problems and 9 supporters providing advanced approaches to promote and disseminate such sports, and narrative records were created to perform content analysis, with the aim of clarifying the significance and purpose of being engaged in them.

In addition to competition-oriented attitudes and the desire to improve one's performance, rehabilitation and communication with peers were extracted as the significance/purpose of being engaged in competitive sports recognized by the athletes. Half of them positively considered participation from an emotional aspect, rather than perceiving its negative influences on their pathological conditions. They expected event policies to promote their social inclusion. They were also suggested to be anxious about their pathological conditions while devoting themselves to competitions. A large number of them began to join teams in facilities they casually belonged to, and it was rare for them to search for appropriate teams to belong to independently.

The supporters had experience of performing sports. They had realized the positive effects of competitive sports on people with mental health problems, and changes in their impressions through support. Their activities aimed to promote the reduction of stigma toward such people and their social inclusion through sports.

Based on the results, competitive sports should be considered from the perspective of not only athletes' competitiveness or desire to improve their performance, but also social rehabilitation for their resocialization. They may start to participate in competitive sports as recreational activities, and, having been empowered in the process of gradually expanding the objective of such participation, become resocialized as a result.

Key Words : people with mental health problems, competing sports, social inclusion
resocialization

* Teikyo Heisei University 4-1 UruidMinam,Ichihara-city,Chiba 290-0193 Japan

** Japan college of social work graduate school doctor's course 3-1-30Takeoka, Kiyose-city, Tokyo 204-8555 Japan

1. はじめに

障がい者スポーツとは、「障害のある人も実践可能な運動やスポーツのことを指すが、何か特別な領域のスポーツというわけではない。リハビリテーション（医療分野）や障がい児の体育（教育分野）、日常生活のQOL（生活の質）向上のため（福祉分野）、勝つことや技術向上、楽しみのため（スポーツ分野）などさまざまな場面で多様な目的を持って実践される」と定義される。近年は障がい者だけでなく様々な人が参加出来る、よりソーシャル・インクルージョンの視点を強くした「アダプテッド・スポーツ」という概念も提唱されている。

第二次世界大戦後、戦争負傷者の医学的リハビリテーションとして導入された経緯から、障がい者スポーツは身体障がい者を中心に進んできた。現在は医学的リハビリテーションだけではなく、QOLの向上やノーマライゼーション、健康増進と社会参加などの意義も報告されている。また2014年には、東京パラリンピックを見据えて全国障害者スポーツ大会の管轄がオリンピックと同じ文部科学省に移管され、パラリンピック選手についてもオリンピック選手同様の強化措置を行うための措置が取られるなど、より競技性に重きが置かれる傾向が伺われる。

その他にも、中途障がい者における救済装置としてのスポーツの重要性や中途障がい者が再度社会へつながっていくきっかけとなり得ることなどの指摘がされており、身体障がい者を対象とした競技スポーツの重要性は広く認知されてきている。パラリンピックに代表されるように、競技としての分野も確立していると言えるだろう。

一方で、精神障がい者を対象とした競技性スポーツは、大きく出遅れている。2001年に開催された全国障害者スポーツ大会では、過去に全国規模の大会実績がなかったことから、身体障がい者や知的障がい者との同時参入することが出来なかった。2008年、ようやくバレーボールが正式種目化されたが、精神障がい者総数320万人に対して1種目でしかない。

精神障がい者においても様々な好影響が指摘されており、身体障がい者や知的障がい者同様大きな意義や効果が期待されている。しかし現状では当事者の権利や意義の面からも実施・普及は不十分と思われる。

2. 目的

本研究の目的は、当事者選手・および支援者に対

して聞き取り調査を実施し、その結果から精神障がい者スポーツの実施・普及モデルを構築することである。

3. 方法

1) 当事者選手に対する聞き取り調査

競技性スポーツ大会に、選手として携わっている精神障がいを持つ当事者選手（以下選手）を対象にインタビューガイドを用いた（図1参照）半構造化面接による聞き取り調査を実施。聴取目的は、精神障がいを持つ当事者選手が、競技性スポーツに取り組むことの目的や意義、課題などを聴取することで、当事者が望む競技性スポーツ大会のあり方を明らかにすることである。

対象者選出については、競技性スポーツ大会に出場している当事者チーム・代表者もしくは地域のキーパーソンに趣旨説明を行い、協力を依頼。チーム選出については公式大会（県大会以上）に出場経験があり、連絡先等が公開されているチームとする。チーム代表者を通じて調査協力を依頼し、その上で同意が得られた当事者選手を対象とした。

なお本調査は、日本社会事業大学社会事業研究所研究倫理審の承認を得て実施した（平成27年5月14日承認：受付番号14-1201）。

2) 支援者に対する聞き取り調査

先進的な実施・普及に取り組んできた支援者（以下支援者）を対象に、意義・目的の聞き取り中心のインタビューガイドを用いた（図2参照）半構造化面接を実施。聴取目的は、これまで精神障がい者を対象とした競技性スポーツ大会の開催や、実施・普及に取り組んできた支援者が、実施・普及に取り組むことの意味・意義や効果的だった取り組み、今後の課題や展望などを聴取することで、効果的な実施・普及のありかたを明らかにすることである。

対象者の選出については、これまで精神障がい者を対象とした競技性スポーツ大会の開催や、実施・普及に取り組んできた団体代表者、もしくはそれに代わる関係者に対して趣旨説明を行い、協力を依頼し、その上で同意が得られた支援者を対象とした。なお、本研究は日本社会事業大学社会事業研究所研究倫理審の承認を得て実施致した（平成27年5月14日承認：受付番号14-1202）。

3) 分析方法

聞き取り内容はICレコーダーにて録音し、後日逐語録を作成。分析方法は、共に内容分析を行う。

Ver1.0

**精神障がい者を対象とした競技性スポーツ大会の実施・普及モデル開発に関する聞き取り調査
聞き取り調査ガイドライン(当事者選手用)**

所属チーム：	
面接日：平成 年 月 日	調査時間： 時 ～ 時
回答者 ID：	調査員氏名： 錦田英樹

【競技性スポーツ大会に参加する目的・意義】

- 競技性スポーツに参加するようになった経緯
- あなたは、どのような経緯で競技性スポーツに取り組むようになりましたか。
 - ・なぜレクリエーションではなく、競技としてのスポーツに取り組むのですか
- あなたが競技性スポーツに取り組むようになって、何か身体的な影響がありましたか。
 - ・良い影響はありましたか。またどのような影響でしたか。
 - ・悪い影響はありましたか。またどのような影響でしたか。
- あなたが競技性スポーツに取り組むようになって、何か病状に変化はありましたか。
 - ・良い影響はありましたか。またどのような影響でしたか。
 - ・悪い影響はありましたか。またどのような影響でしたか。
- あなたが競技性スポーツに取り組むようになって、何か気持ちに変化はありましたか。
 - ・良い影響はありましたか。またどのような影響でしたか。
 - ・悪い影響はありましたか。またどのような影響でしたか。
- あなたにとって、競技性スポーツに取り組むことの意義や目的は何ですか。
 - ・どのようなことから、そう感じましたか。
- あなたは、同じ障害を抱える仲間などに、競技性スポーツについて紹介をしていますか。
 - ・それは、どうしてですか。
- あなたは競技性スポーツ大会に、どのようなことを望んでいますか。
 - ・それは、どうしてですか。

【当事者選手へのサービス提供】

- 大会に参加するまでの準備
- あなたは、どのような経緯で現在のチームに所属しましたか。
 - ・チームの情報を、どこで得ましたか。
 - ・チームには、スムーズにたどり着けましたか。
- あなたは、どのような経緯で競技性スポーツ大会にエントリーしましたか。
 - ・大会の情報は、どのようにして得ましたか。
 - ・大会情報は、容易に得ることが出来ましたか。
- あなたが現在、どのような所で、どの程度練習を行っていますか。
 - ・あなたが練習を行う上で、なにか課題はありますか。
- あなたが競技性スポーツを続けていく上で、なにか課題となることはありますか。
 - ・それは具体的に、どのような事ですか。
 - ・その課題を解決するためには、どのようなことが必要ですか。

◇◇ ご協力、どうもありがとうございました ◇◇

図 1.インタビューガイド (当事者選手用)

Ver2.0

**精神障がい者を対象とした競技性スポーツ大会の実施・普及モデル開発に関する聞き取り調査
聞き取り調査ガイドライン(支援者用)**

所属団体：	
面接日：平成 年 月 日	調査時間： 時 ～ 時
回答者 ID：	調査員氏名： 錦田英樹

【競技性スポーツ大会の開催や普及・推進活動をおこなう目的・意義】

- 競技性スポーツの実施・普及活動を行うようになった経緯
- あなたは、どのような経緯で競技性スポーツの実施・普及活動に取り組むようになりましたか。
- あなたは過去に、何かスポーツ経験がありますか。
 - ・そのことは、今の活動に取り組む上で何か関係がありますか。
- 競技性スポーツの実施・普及活動に携わることで、あなた自身に心算の変化はありましたか。
 - ・それは、どのような変化ですか。
- あなたにとって、競技性スポーツの実施・普及活動に取り組む意義は何ですか。
 - ・どのようなことから、そう感じましたか。
- あなたは精神障害をお持ちの方に、競技性スポーツについて紹介をしていますか。
 - ・それは、どうしてですか。
- あなたは周囲の支援者に、競技性スポーツについて紹介をしていますか。
 - ・それは、どうしてですか。
- あなたは競技性スポーツに、なにか望ましい展望を持っていますか。
 - ・それは、どのような展望ですか。

【当事者選手へのサービス提供】

- 競技性スポーツの実施・普及に向けた活動
- あなたは、競技性スポーツの実施・普及に向けて、どのような活動を行ってきましたか。
 - ・具体的に、どのような活動ですか(大会の開催や教室など)
 - ・中でも重要だと感じたものは、何ですか。
 - ・なぜ、そのように感じましたか。
- あなたは、競技性スポーツの実施・普及に向けて、多職種と有志の会(実行委員会)を立ち上げましたか。
 - ・具体的に、どのような経緯で、何名くらいで構成されていますか。
 - ・中でも重要だと感じた経緯は、何ですか。
 - ・なぜ、そのように感じましたか。
 - ・当事者は、どのような役割を果たしていますか。
- 有志の会(実行委員会)を継続していく中で、組織の在り方は立ち上げ当初に比べ、変化はありましたか。
 - ・それは、どのような変化ですか。
 - ・どのような組織形態が効果的(もしくは効果的)だと考えていますか。
- あなたは、競技性スポーツの実施・普及に向けて、他団体から協力(支援)を得ていますか。
 - ・具体的に、どのような団体から、どのような協力(実働支援・後援・協賛など)を得ましたか。
 - ・中でも重要だと感じた団体は、何ですか。
 - ・なぜ、そのように感じましたか。

◇◇ ご協力、どうもありがとうございました ◇◇

図 2.インタビューガイド (支援者用)

4. 結果及び考察

1) 選手についての調査結果

25名(男性22名、女性3名、平均年齢30±5.6歳)を対象に聴取を行った(平均聴取時間27分)(表1)。なお、25名中6名はフットサル世界大会の選抜選手であり9名はフットサルの全国大会、地区選抜選手との実績を持つことから、競技性スポーツの対象者として代表性があると判断致した。

表1. 選手の属性

No	ID	年齢	性別	診断名
1	A01	30代	男性	統合失調症
2	A02	30代	男性	統合失調症(疑い)
3	A03	20代	男性	統合失調症
4	A04	20代	男性	統合失調症
5	A05	30代	男性	統合失調症
6	A06	30代	男性	統合失調症
7	A07	非公開	女性	気分障害
8	A08	30代	男性	統合失調症
9	A09	40代	男性	うつ病性障害
10	A10	20代	男性	統合失調症
11	A11	20代	男性	社会不安性障害
12	A12	20代	男性	社会不安性障害
13	A13	20代	男性	社会不安性障害
14	A14	20代	男性	チック
15	A15	20代	男性	統合失調症
16	A16	30代	男性	適応障害、うつ
17	A17	30代	女性	統合失調症、パニック
18	A18	30代	男性	強迫性障害、てんかん
19	A19	40代	男性	統合失調症
20	A20	20代	男性	うつ病、摂食障害
21	A21	20代	女性	統合失調症
22	A22	20代	男性	適応障害
23	A23	20代	男性	統合失調症
24	A24	30代	男性	統合失調症
25	A25	30代	男性	統合失調症

結果、7つのカテゴリーが抽出された(表2参照)。なお、本文中においてカテゴリーについては【 】、サブカテゴリーについては< >、対象者の発言については太字・斜体で示した。

①【競技としてスポーツに取り組む意義・目的】

競技性スポーツに取り組む選手であるため、当然ながら<競技志向・向上心>といった意見が多く聞かれた。

やっぱり公式の大会に出ると言うことは、勝つという事が目標にてられるっていうので、意欲

的に取り組める。デイのお遊びみたいのとは違うので (A703)

しかし、一方で<リハビリテーション>や<仲間との交流>との意見も伺われた。

②【病状への影響】

<症状の安定>を感じている者が多数であったが、一方で<影響なし>と感じている者や<不安や疲労>を訴えるものも見られるなど、必ずしも医学的リハビリテーションとして機能している訳ではなかった。

大会が近づく、ちょっと体調的に悪くなったとか、何か緊張して、ちょっと不安になったりとかはありましたね。(A2109)

③気持ちの変化

医学的な変化というより、<前向きになれた><自信がついた>などの気持ちの変化が伺われた。これらの経験を踏まえて就労など社会に戻っていく選手が多いことから、社会的リハビリテーションとして競技性スポーツが機能していることが示唆された。

前向きになりましたかね、何事も。もともと結構やっぱり後ろ向きだったんですけど、やっぱり、どんどん上を目指したいっていう部分も増えてきたし。(A1614)

④【大会に望むこと】

<ルールの厳格化>や<上位大会の整備>が望まれる一方、多くの選手が<ソーシャル・インクルージョン>を大会に望んでいた。世界選抜に出るような選手があえてソーシャル・インクルージョンを望むところに、精神障がいスポーツの特徴が伺われた。

あんまり、くくりをつくらないでほしいですよ。本当に健常者も性別も年齢も障害の種類とかも関係なく、ごた混ぜで僕はやりたいですよ。(A2415)

⑤【今後の課題】

<競技人口の不足>が挙げられており、なかなかチームやメンバーが増えないことが挙げられた。また競技に専念する一方で、自身の<病状への不安>を持っていることが示唆された。

病状、今は安定してますけど、もし悪くなったら続けられなくなるっていうのは、不安はありますね。(A1632)

また大会へのエントリーなども<スタッフ主導>で行われており、多くのチームがスタッフ主導で運営されていた。また<就労や日々の生活>をこなすため、競技を継続することが困難になったり、<経済的な問題>により、大会に参加することが難しい選手が出てきていた。

社会に進出するにつれて、そっちが忙しくな
て難しくなってくるのかなあと。競技をすること
が (A1124)

お金が出る選手の中の選抜チームみたいな感
じになってきてる。(A1349)

⑥【チーム加入の経緯】

またチーム加入の経緯について、ほとんどの選
手は所属した施設から紹介されてチームに繋が
っており、チームを自ら探して所属した方は少数
だった。

所属している施設がスポーツが盛んな施設で、
「やってみないか」と声をかけられて。で、始め
たのがきっかけです。(A101)

⑦【その他】

地域型クラブチームの選手にはく仲間に対す
る思いを訴える選手も多く、クラブチームがピ
アサポートの効果からスポーツを介したクラブ
ハウスの機能を持つことが示唆された。

自分が一番苦しんでいるときに出会った仲間
です。今はお互いの仕事があって、話したり一緒
にいたりする時間は少なくなりましたが、自分
が生きていくうえで、当たり前だけど欠かせない
人たちです。(A255)

表2.選手インタビューから抽出されたカテゴリー

メインカテゴリー	サブカテゴリー	n
競技としてスポーツ に取り組む意義・目的	競技志向	21
	リハビリテーション	14
	仲間との交流	11
	レクリエーション	10
	やりがい	7
	保護的環境の希求	5
	変化への期待	3
	その他	4
病状への影響	症状の安定	18
	変化なし	11
	不安・疲労の影響	16
気持ちの変化	前向きになれた	9
	自信がついた	8
	気分の充実	7
	心理的ストレス	6
	生活の変化	4
大会に望むこと	ソーシャル・インクルージョン	14
	より一層の普及	12
	レクリエーション	7
	ルールの厳格化	6
	上位大会の整備	6
	継続してほしい	4

	競技種目の拡大	3
	その他	2
競技性スポーツに 取り組む上での課題	就労や日々の生活	12
	経済的問題	10
	競技人口の不足	8
	病状への不安	8
	目標の不一致	5
	練習場所の確保	4
	チーム加入の経緯	17
チーム加入の経緯	スタッフや仲間からの勧誘	17
	親の勧め	4
	ニュースで見た	1
	偶然知った	1
その他	チームや仲間への思い	6
	指導者の希求	5
	偏見に対する不安	2

2) 支援者に対しての調査結果

9団体9名(男性8名、女性1名、平均年齢45.7
±10歳)を対象に聴取を行った(平均聴取時間4
7分)(表3参照)。

表3.支援者の属性

	ID	年齢	性別	職種	主要な関連団体
1	B01	50代	男性	OT	九州精神障害者スポーツ 推進連絡協議会
2	B02	30代	男性	OT	愛知県精神障害者 スポーツ連盟
3	B03	60代	男性	PSW	NPO法人ソーシャル フットボール協会
4	B04	50代	女性	OT	ヴァンフォーレふれあい カップ実行委員会
5	B05	40代	男性	OT	La+place (クラブチーム主催者)
6	B06	30代	男性	OT	NPO法人日本ドリーム バスケットボール協会
7	B07	40代	男性	DR	千葉県コルツァカップ 実行委員会
8	B08	40代	男性	DR	北海道精神障害者スポーツ サポーターズクラブ
9	B09	30代	男性	OT	京都府精神障害者 フットサルクラブ

対象者の9名は、全国にて先進的な取り組みを
している法人もしくは任意団体の代表者・役員で
あり、過去の実践から適任と判断致した。

結果、8つのカテゴリーが抽出された。(表4参
照)なお、本文中においてカテゴリーについては【
】、サブカテゴリーについては< >、対象

者の発言については太字・斜体で示した。

①【取り組むきっかけ】

支援者の多くは<リハビリテーション>のきっかけとして取り組んだものが多く、他はバレーボール競技が<障害者スポーツ大会>において精神障がい者を対象とした公式種目になったことを契機に活動に取り組んでいた。

何かスポーツで患者さんが社会に出れるとか、社会と触れ合えるような機会を作りたいなあと思ってたんですけど、デイケアにいったらちよつと、フットサルというのがきっかけでした。はい。(B4102)

②【自身のスポーツ体験の影響】

支援者の多くは、<自身のスポーツ経験>を背景にスポーツ活動を行っており、そのことが取り組みに大きく影響していた。

サッカーですね。中学、高校、大学。就職してからも、ずっとサッカー。自分がやってたスポーツだからって言うところですね。(B8105)

③【自身の心境の変化】

また活動を通して<効果の実感>や自身の<イメージを覆された経験>をしていた。

それがある日、場所を変えて関わってみたら、こんなに環境一つで動くことが出来るし。そこまで出来るか、やれるかっていう私の中の価値観を、ガラッとひっくり返してくれた一つの機会ではあったかなと。(B5109)

④【意義・目的】

また、当事者がスポーツを通し健康な面を示すことがアンチ・スティグマに繋がることや、スポーツを介したソーシャル・インクルージョンとなることを目的としていた。

医療者が持つ、一般が持つ、障害者自身が持つスティグマってものを、すべて取り払うことが出来ればって言うことなんですね (B6119)

⑤【これまでの活動】

実施・普及の取り組みとして、<大会運営>や<教室の開催>が効果的とされ、大会開催の実行委員会には医療・福祉関係者だけでなく当事者や一般市民も加わっていることが多かった。また実行委員会の構成も<当事者の主体性が増す>などの変化が生じて来ていた。

より当事者の意見が反映されやすくなりましたかね。(B7141)

また<プロスポーツチームからの協力>も効果的な取り組みとして挙げられた。事実、Jリーグなどに協力を仰いでいる団体は多く、プロスポーツチームが協力することが当事者選手のモチベーションや自尊心を高めることが指摘された。

やる人のモチベーションが、全然違ってくるかなって言うところ。一応、トップリーグの人たちが絡んでいるっていう風なところは、自尊心だったり自己肯定感だったりとか。そのへんに影響してくる。(B7150)

⑥【今後の展望】

今後の展望については選手同様、ソーシャル・インクルージョンが挙げられた。また、より一層の実施普及が望まれていた。

本当な意味で、フラットに話せるっていうところが、私は理想的だなと思っていて。言ってしまうえば、そのスポーツに興味がある人たちが、自分の責任でこれるんであれば、もう当事者も支援者も関係ないのかなって思って。(B714)

やる人が増えたらいいなど。裾野がもっともつと広がっていけばいいなっていうふうに思いますね (B8117)

⑦【実施・普及への示唆】

チームの在り方については<地域型クラブチームへの移行>が期待されていた。また当事者選手による大会の運営などが期待されていた。

選手が増えないのは、チームの母体が病院だったりクリニックだったり。だから当然、そこに通う人でサッカーやる人がいなければ増えないです。(B8175)

⑧【実施普及の課題】

金銭的な課題が大きく、そのことが大会参加などにおいてしようとなっていることが挙げられた。

サラリーマンの給与所得に比べれば、全然もらえてないんじゃないかな。それは精神障害って、障害を持っているがゆえに起こってることなんであれば、もう少しかけるお金も少なく出来ないかなと思ったりはします (B5229)

また競技性が高まるにつれて新しい人が入りにくい状況が生じていることが示唆された。

競技性が高まると、新たに入ってくる人の問題が出てきて。非常にレベルの高いところで、入りづらいついていうようなところがあって (B6164)

表4.支援者インタビューから抽出したカテゴリー

メインカテゴリー	サブカテゴリー	n
競技としてスポーツに取り組むきっかけ	リハビリテーション	4
	全国障害者スポーツ大会	2
	学会での声かけ	1
	当事者からの希望	1
	いろいろなつながりから	1

自身のスポーツ体験の影響	自分の経験が背景にあった	7
	自分もスポーツをしたい	5
自身の心境の変化	効果の実感	7
	イメージが覆された	5
	意味のあることが実践できた	1
	一つの表現方法と感じた	1
	視野が広がった	1
競技性スポーツを推進する意義・目的	アンチ・スティグマ	4
	リハビリテーション	4
	ソーシャル・インクルージョン	3
	仲間としての活動	3
	自己実現	3
これまでの取り組みや効果的な取り組み	大会運営	10
	教室回会	7
	広報活動	5
	スポーツイベント	3
今後の展望	ソーシャル・インクルージョン	4
	普及・推進	4
	競技と交流双方の必要性	3
	スポーツ関係者の参画	3
	きちんとした組織作り	3
実施・普及への示唆	当事者の意見を反映	3
	広報の重点化	3
	スポーツ団体とのタイアップ	1
	地域型クラブへの移行	1
	当事者主催の大会開催	1
実施・普及の課題	選手会の設立	1
	支援者の先入観	3
	会場確保がしにくい	3
	新人が入りにくい	3
	チーム数・参加者数の伸び悩み	4
金銭面	8	

5. まとめ

精神障がいを持つ当事者選手にとって、競技性スポーツは競技性を高め個々の向上心を満たすのみではなく、多様な目的を重層的に含んでいることが示唆された。ケニヨン¹⁾はスポーツ社会学において、人がスポーツを行うようになる過程を明らかにした。藤田²⁾らは、身体障害における中途障害者がスポーツで再起する過程をスポーツの社会化で説明している。精神障がいも同じく中途障害とするならば、ニーズを持つ当事者が重要な他者としてスポーツに取り組むスタッフや仲間と

出会い、スポーツ活動という社会化場面において役割り学習をしていき、再起していくのだと考えられる（図3参照）。

多くの選手ははじめ、レクリエーションとしてスポーツに取り組んでいる。そこから次第に競技性という目的が追加され、ソーシャル・インクルージョンといった目的が加わるなど、重層的な活動へと移行していくのだと考えられる。また、それらの活動の中でエンパワメントされ、自信を取り戻して再社会化へと向かうと考えることが出来る（図4参照）。

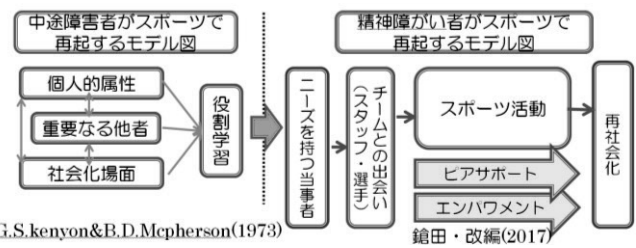


図3. スポーツによる精神障がい再社会化モデル

また支援者は、競技性スポーツを介してのソーシャル・インクルージョンやアンチ・スティグマを活動の目的としており、そのことが大きなモチベーションとなっている。初めは支援者主導の推進ではあるが、次第に選手主体にスライドしていくことで選手をエンパワメントしていく重要な支援の方法と言えるだろう。

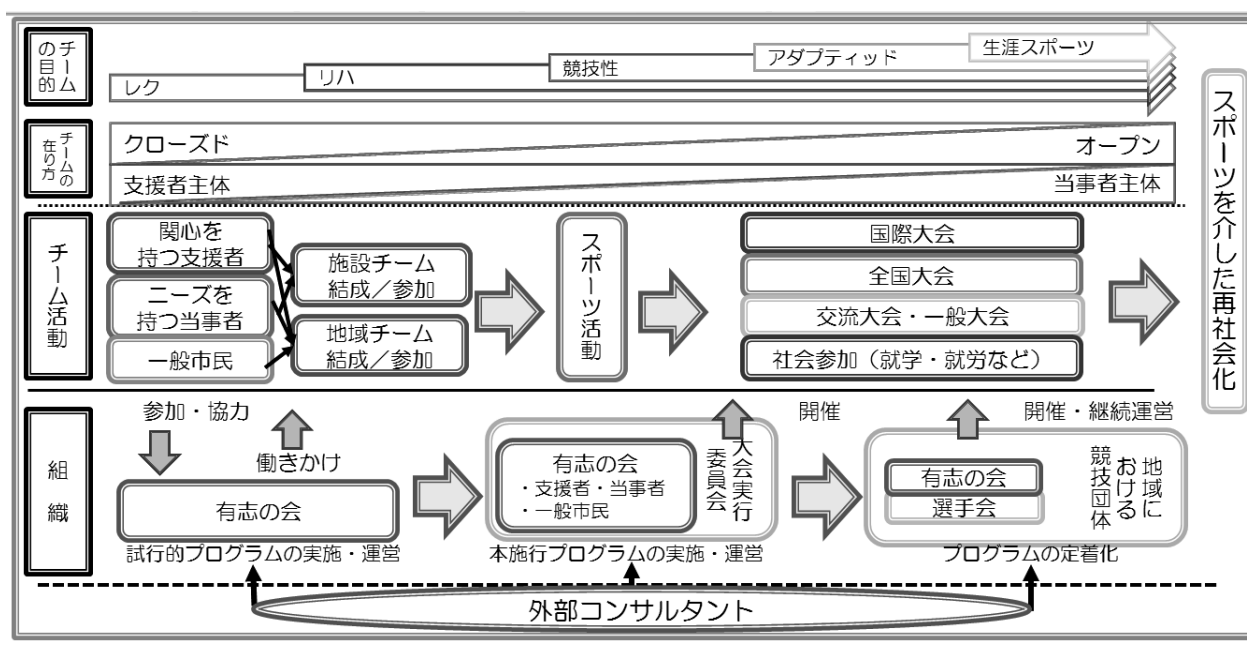


図4. 精神障がい者を対象とした競技性スポーツの実施モデル (暫定版)

参考文献

井上誠士郎. 精神障害者スポーツの今とこれから 精神障害者スポーツの国際化に向けて 地域での取り組みから. スポーツ精神医学 10 巻 : 21—26, 2013

内田直. 規則的にスポーツをしているデイケア患者の生活時間の特徴. 厚生労働科学研究, 2002

内田直, 高畑隆, 宮崎伸一. 精神障害者スポーツと競技性. 精神神経学雑誌 104 巻 12 号 : 1242—1248, 2002.

大西守. 精神障害者スポーツの歴史と課題. 社会精神医学研究所紀要 36 巻 1 号 : 10—15, 2007

大西守, 高畑隆, 浅井邦彦. スポーツとメンタルヘルス 精神障害者スポーツの振興に関する最近の動き. 臨床精神医学 31 巻 11 号 : 1411—1415, 2002

大西守, 高畑隆, 田所淳子. 精神障害者スポーツ振興のための体制整備に関する調査研究. 平成 20 年度「精神障害者スポーツ(バレーボール)大会開催事業」報告書. 社団法人日本精神保健福祉連 : 47—65, 2009

大西守. 日本における精神障害者スポーツの展望. 日本社会精神医学会雑誌 17 巻 1 号 : 57—61. 2008

大西守. こころとスポーツ 精神障害者スポーツの現状と課題. スポーツ精神医学 1 巻 : 11—15. 2004

大西守. 精神障害者のスポーツ振興のための組織基盤確立に関する研究, 厚生労働科学研究費補助金 厚生労働特別研究事業. 平成 14 年度総括・

分担研究報告書 : 14, 2003

岡崎伸郎. 精神障害者スポーツ振興の現状と展望—障害者スポーツ界における真の三障害統合を目指して—. 日本社会精神医学会雑誌 12(2) : 179—186, 2003.

岡崎伸郎. スポーツ精神科医の役割 精神障害者スポーツ振興における精神科医の役割. スポーツ精神医学 1 巻 : A16, 2004

岡村武彦, 高谷義信, 大西守, 他. 統合失調症における競技スポーツと薬物療法について. スポーツ精神医学 4 巻 : 25—30, 2007

草野勝彦. アダプテッド・スポーツと障害者・高齢者の福祉. アダプテッド・スポーツの科学 : 19—21, 2009

倉本拓, 高谷義信. 精神障害者の競技スポーツに参加して—当事者の声—. 精神神経学雑誌 112 巻 1 号 : 32—33, 2010

向後裕子, 高橋真三樹, 鈴木剛, 他. 精神障害者スポーツ振興(ソフトバレーボール大会)の経過と今後の課題. 精神保健シリーズ 36 号 : 2—15, 2006

厚生労働省ホームページ (2014). 平成 25 年度版 障害者白書. 厚生労働省 2014 年 5 月 9 日 <http://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/h25hakusho/zenbun/index-pdf.html> >

酒井一浩. 精神障害フットサルがメンバーに与える影響. 日本作業療法学会抄録集 46 : 845—845, 2012

坂井 一也. スポーツ精神医学におけるコメディカルの役割 作業療法士の立場から. スポーツ

精神医学 8 巻 : 12-17, 2011.

坂井一也. 精神障害者スポーツの効果と課題
障害者スポーツ大会参加者調査. 健康科学大学紀
要 6 巻 1 号 : 217-225, 2010

高野隼, 吉村匡史, 村上貴栄, 他. 地域運動プ
ログラムの有用性 —精神障害者サッカーアカデ
ミー参加を通して—. 日本作業療法学会抄録集
46 : 346-346, 2012

高橋春一. 精神障害者スポーツの今とこれから
精神障害者スポーツ実態調査. スポーツ精神医学
10 巻 : A32, 2012

Takahashi H, Kato M, Sassa T, et al. Functional
deficits in the extrastriate body area during
observation of sports-related actions in
schizophrenia. Schizophr Bull 36(3) : 642-7,
2010

高畑隆. スポーツと精神医学—精神障害者スポ
ーツ競技の動向. 臨床精神医学 40 巻 9 号 :
1159-1167, 2011

高畑隆. 精神障害者スポーツの今とこれから
わが国の精神障害者スポーツ大会とその推移. ス
ポーツ精神医学 10 巻 : 14-20, 2013

高畑隆. 障害者スポーツ協会と精神障害者. 埼
玉県立大学紀要 10 巻 : 43-47, 2009

高畑隆. 精神障害者とスポーツ大会. 埼玉県
立大学紀要 10 巻 : 49-55, 2009

田所淳子. 精神科領域における QOL の向上 精
神障害者スポーツがもたらすもの. 外来精神医療
9 巻 1 号 : 26-30, 2009

田中暢子. 精神障害者スポーツ推進システムに
関する国際比較研究. 平成 25~27 年度 科学研
究費補助金「基盤研究 (C)」1 年次 研究成果報
告書 : 2013.

日本体育学会監修. 障害者スポーツ. 最新スポ
ーツ科学辞典 : 384, 2015

日本体育学会監修. 障害者スポーツ. 最新ス
ポーツ科学辞典 : 385, 2015

西銘智美, 荒川志保, 大塚俊弘. 長崎県におけ
る精神障害者スポーツ交流事業の効果. 作業療法
19 巻特別 : 141, 2000

濱野強, 藤澤由和, Nam Eun Woo. 精神障害者
における QOL 評価の試み 精神障害者のスポーツ
活動の有用性の検討. 新潟医療福祉学会誌 5 巻 1
号 : 40-47. 2005

濱野強, 片見眞由美, 日渡秀世, 他. 2 地域にお
ける精神障害者スポーツの展開に関する一考察.
日本健康教育学会誌 12 巻 Suppl. : 122-123, 2004

Battaglia G, Alesi M, Inguglia M, Roccella
M, et al. Soccer practice as an add-on treatment

in the management of individuals with a
diagnosis of schizophrenia. Neuropsychiatr Dis
Treat 9 : 595-603, 2013

平井麻紀, 小泉典章, 松本忠巳, 他. 3 年間に
わたる本県の精神障害者スポーツ支援の報告. 精
神神経学雑誌 109 巻 6 号 : 623, 2007

藤田紀昭. ある身体障害者のスポーツへの社会
化に関する研究—車いすバスケットボールプレ
ーヤーの個人史より—. スポーツ社会学研究 6 :
70-83, 1998

Mangerud WL, Bjerkeset O, Lydersen S, et
al. Physical activity in adolescents with
psychiatric disorders and in the general
population. Child Adolescent Psychiatry
Mental Health. 22.8(1) : 2. 2014

皆川倫実, 行實志都子, 田村綾子. 精神障害者
スポーツを行うことにより精神障害のある方の
精神面での変化の有効性 団体競技と個人競技
の比較から. 精神保健福祉 41 巻 3 号 : 252-253,
2010

鎗田英樹. 障害領域別にみる障害のある方のス
ポーツ① 精神障害領域における スポーツ. 作
業療法ジャーナル vol148. 10 : 1013-1016, 2014

鎗田英樹. 千葉県における精神障がい者バス
ケットボール推進の試み. スポーツ精神医学 9 巻 :
A39, 2012.

鎗田英樹, 大角浩平, 押鐘正幸, 他. 千葉県に
おける精神障がい者フットサル推進の試み. 日本
作業療法学会抄録 46 : 348-348, 2012

横山浩之. 精神障害者スポーツの今とこれから
精神障害者スポーツの効果. スポーツ精神医学 9
巻 : A31, 2012

吉田毅. 後天的身体障害者のスポーツへの社会
化の諸相—車椅子バスケットボール男子選手を
事例に—. 東北工業大学紀要. 人文社会科学編 :
29:47-56, 2009

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施
したものです。

